

## 第1節-1「実技」 ハサミで形を切り抜く能力

山村 雅宏

### 要約

手の運動能力は、日常生活に必要な身の回りのことを行う能力である。幼児の手の運動能力についてその発達を見ると、胴体の筋肉から腕、手首、手先へと進んでいく。また手の巧みさは、全身運動の発達よりも精神発達との相関関係が高いことが知られており、自立の基礎となる。幼児期の初期は不器用に親指以外の4本でモノをつかむが全身運動から手の運動が分化すると同時に目との協応が始まる。しかし3歳児ではまだハサミの握り方、持ち方ができない幼児がいる。

4歳児ごろになると両手指の分化・協応が修得されて様々なことが可能になる。5~6歳児は親指と薬指との対置ができ、両手の指を対応させることができる。幼児個々の発達状況により違いはあるが手指の分化がさらに進みハサミを正しく持てるようになる。ハサミで形を切り抜くには指先の器用なものが早く、また上手く切り抜くことができる。3歳児・4歳児・5歳児に分けてハサミで形を切り抜く作業をさせて発達の違いを検証とすることをねらいとした実験を試みた。

### キーワード

ハサミの持ち方、手と目の協応、指の使用、手の巧緻性、切り抜く力

## 1. 課題提起

子どもの手の不器用さが社会で問題になって1985年に谷田貝公昭<sup>(2)</sup>によって全国の幼児から中・高生まで約4,700人を対象に、日常生活技術22の動作について実態調査が行われた。1950年代後半には牛島義友<sup>(1)</sup>等によって「社会的生活能力検査」を実施された。牛島等が調査した時の幼児に比べ「運動能力」とりわけ「日常生活の手技的な諸能力」、たとえば「紐を結べない」「箸を使えない」「ハサミで形を切ることができない」など手の巧緻性に遅れが見られたということが、谷田貝公昭による調査によって確認された。しかし、日本保育学会の調査(1985年)によると「まる」や「ひし形」の図形の手本を見て、それを正確に書き写すといった幾何図形の認知と結びついた手の技能は現在の方が優れているという結果が出ている。今回、2009年には「ハサミを使う技能」に絞って幼児を対象に調査することにした。

## 2. 研究の目的

手の運動能力は日常生活に必要な身の回りのことを行う能力である。

### (1) 研究目的1

3歳児ごろから両手指の運動が分化し目との協応が習得できる。そこでハサミを使って形を切り抜く作業をさせ3歳児・4歳児・5歳児の発達に応じた実技能力を調査する。

### (2) 研究目的2

1985年に「日常生活技術22動作」の実技調査(谷田貝公昭<sup>(2)</sup>等)が行われた。その結果と2009年に調査したK幼稚園の園児との比較を行う。

### 3. 研究の対象

年少組（3歳児）8名、年中組（4歳児）8名、年長組（5歳児）8名。対象児は幼稚園教員により無作為に抽出した幼児である。

### 4. 研究の方法

#### (1) 準備

- ・ハサミ 8丁（右利き用と左利き用）
- ・切り抜いた作品を入れるかご 8個
- ・画用紙1枚ごとに△、○、□を書き、3枚1組として8組を用意する。

#### (2) 作業の順番

4歳児～3歳児～5歳児の順とした。

#### (3) 座席

机には片側4人が男女交互に、両側に向かい合って座る。（8人）

#### (4) 作業

幼児は△印の用紙を切り抜くと、次は○印の用紙を渡す、切り抜くことができれば最後に□印の用紙を渡す。△～○～□の順に渡す

### 5. 研究の内容

#### (1) 作業の説明

K協力園の教師から園児に次のように説明をした。

「今日は、ハサミで楽しいことをします。皆さんに三角とまると四角の書いた紙を渡しますから、この紙を切ってください。一つが切れたら手を上げてください、次の紙を渡します。早く切る競争ではありません」

園児には切り抜いた作品を入れる「かご」とハサミを渡す。

助手が幼児の進行を見ていて、手を挙げた幼児に△、○、□を書いた画用紙を配る。

教師「では始めてください。」という。園児は一斉にハサミで切り始める。

#### (2) 観察（作業の状況）

##### A 3歳児

##### ①ハサミの持ち方

- 1) ハサミの持ち方は親指を上の人差し指と中指、薬指まで下に入れていたもの
- 2) ハサミを両手で持って切ろうとしていて隣の幼児を見てまねしているもの
- 3) 親指を下に入れ上に人差し指、ハサミの外側の上に他の3本で持って切るもの

##### ②ハサミでの切り方

##### <三角形>

- 1) 三角の形は線から多少はみだしながら切れる。
- 2) 説明が理解できないのか三角形を書いた画用紙を縦に3分の2ぐらいからのところから切り離していた。

## 第4章 未来型のこどもの表現力と促進法

- 3) 三角を切り抜くとき線に沿ってまず一回切り落とす、あとも数回にわたりまわりを切り落とす。

<円>

- 1) 円を右から切るか左から切るか考えている。切り方も円に沿ったものより少しずつ切り離していくような切り方である。
- 2) 教師の説明を理解できなく円を書いた画用紙を真ん中から切ってこれをどう結びつけるかを考えていた。
- 3) どの幼児も円からはみだして切っていて難しい課題である。

<四角形>

- 1) 直線が多く切りやすいようだが線に沿っての切り方に苦勞していた。四方を切り落としていく切り方である。
- 2) 四角形を描いた画用紙をどこから切ればよいか考えて四角形の真ん中から画用紙を切っていた。



図1

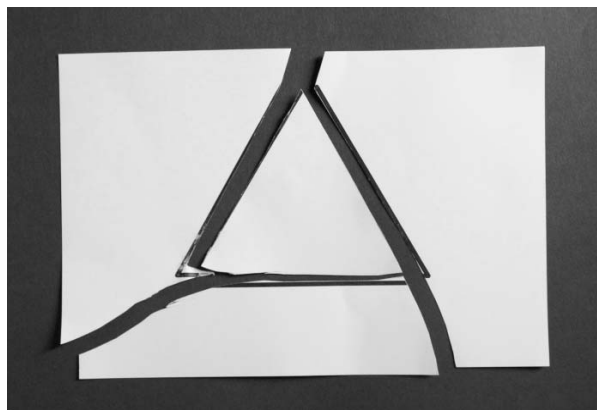


図2

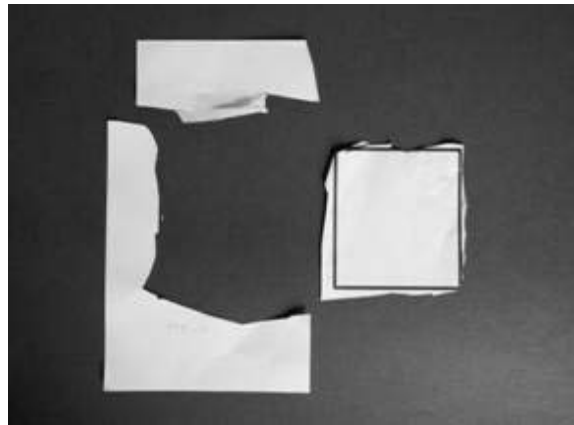


図3

B 4歳児

①ハサミの持ち方

すべての幼児は正しく持つことができた。

②ハサミでの切り方

- 1) 早いものは三角形を線に沿って15秒で切り抜くことができた。
- 2) 円形は、切り方も、はさみの位置は変えずに紙を回して切り抜いていたが線の上を正確に切ることはできなかった。
- 3) 四角形も20秒で切り抜いたが切り口は4つあって直線も線上を上手く切り抜くことは難しかった。
  - ・一人はゆっくり丁寧に切り口を一つにして切り抜いていた。



図4



図5

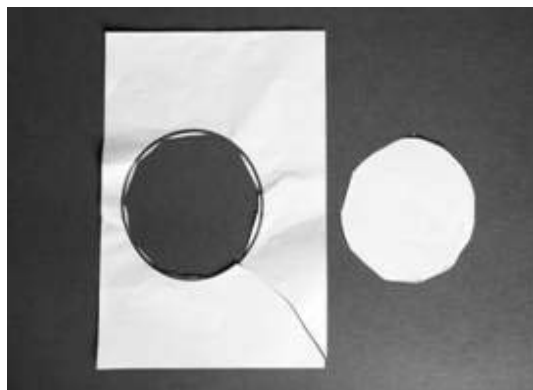


図6

C 5歳児

①ハサミの持ち方、

すべての幼児は正しく持つことができた。

②ハサミで切り抜く

- 1) 三角形の切り口は一つで中身だけ上手く切り抜いた
- 2) 円形は切り口を一つにしてハサミは上下するだけにして画用紙を回して線の上を出たり沿ったりして上手く切ることができた。
- 3) 四角形は切り口を一つにして四角の直線に沿い上手く切ることができた。年長児は教師の説明が不足すると自分独自の理解で勝手に作業に入るものもいる。例えば、教師から「三角を切りなさい」と言う指示に戸惑い描いてある三角形の画用紙を真ん中から切って三角形をどのようにつなぎ合わせるかに苦勞していた幼児もいた。



図7

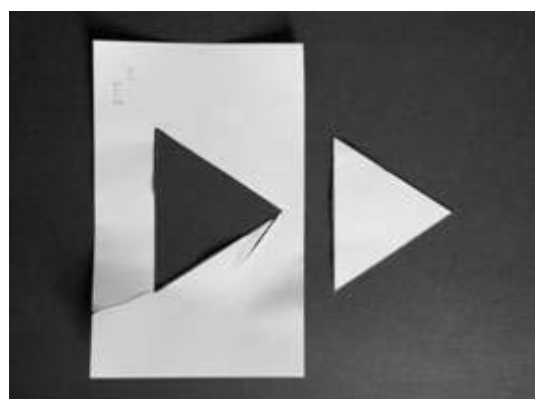


図8

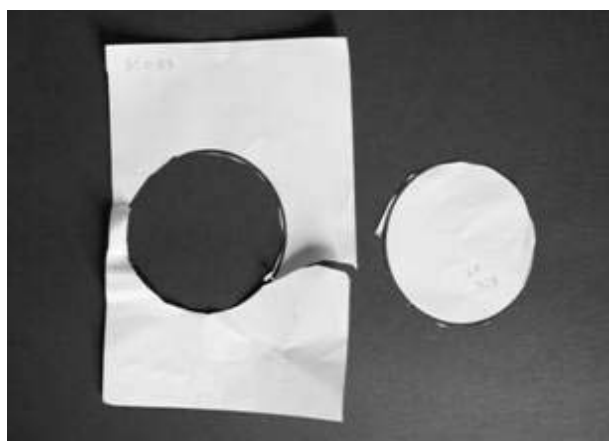


図9

## 6. 結果・考察

4歳児の頃は両手指の分化・協応が習得されて多様な動作が可能になる。5・6歳になると親指と薬指・小指との対置、両手指対応、左右交互開閉など、手指の分化が進みものを上手に使いこなすようになる。例えば、4歳児でねじを回してふたを取り、5歳児では折紙で奴さんができる。

## 第4章 未来型のこどもの表現力と促進法

友達の鉢巻を結ぶことができる。この時期の随意性は対象性を土台にした随意性ということが大きな特徴である。

### (1) ハサミ実技の課題

先行研究を見ると「ハサミを使って簡単なものをつくる」を4歳6ヶ月の実践が見られるが、「社会的生活能力検査」によると「ハサミで形を切り抜く」(単にはさみで紙を切るだけでなく、簡単なものを切り抜けるか)を4歳級の問題としている。

〈表〉 (牛島義友氏による) 1949年「昭和24年発表」<sup>(1)</sup>

社会的生活能力検査に含まれた「ハサミで形を切り抜く」の合格率(%)—

1歳から6歳までの調査

1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
—	2.7	27.6	70.5	92.1	93.3

1985年に「谷田貝公昭」の調査によるとハサミでハートを切り抜くことができる4歳児、5歳児は0%であり小学校1年生で0.8%という結果がでている<sup>(2)</sup>。

### (2) 考察：研究協力園

#### ①ハサミの持ち方

3歳児 8人中2名が正確にもてない。

4歳児 5歳児は全員正確に持つことができた。

#### ②ハサミで形を切り抜く

##### 1) 3歳児

- ・三角形は一辺ごとに切り落としていくが一応切れた30%、
- ・円は線に沿い切り抜けるものは20%
- ・四角は線に沿い切れるものは60%

##### 2) 4歳児

- ・男児1人は三角形・円・四角形ともすべて周りを切り落としていく
- ・あとの7人はどの図形にもハサミを一辺に当ててそのまま切り抜けた幼児と○は線に沿って切れないもの、□は2辺を切り落としたものなどがいた。

##### 3) 5歳児

5歳児はすべての幼児がハサミをうまく使い、ハサミを一つの辺に当て画用紙を回して上手く形を切り抜くことができた。勘違いした幼児は再度挑戦し上手く切ることができた。

##### 4) まとめ

3歳児と5歳児とではハサミの遣い方に大きな違いがでた。

## 7. 結論

### (1) 幼児・児童の能力育成システムについて

①幼稚園教育要領の「指導計画作成上の留意点」には「一般的な留意事項」と「特に留意する事

## 第4章 未来型のこどもの表現力と促進法

項」示されている。ここでは、表現と環境構成の視点から幼児の道具を使った作業能力の研究を進めた。

- ②身近な遊具や用具の仕組みに関心を持ち、遊具を自ら考え、使い方を工夫したり応用したりできようにした。
- ③表現ではいろいろな道具（ハサミやナイフ、木槌など）を使い、自分のイメージしたものを作ることができる。幼児は日ごろから素材に親しみ工夫して、作ったり、遊んだりすることができる。

### (2) 保護者および現職保育者・教員の指導能力育成教育システムの構築について

- ①指導計画の作成について検討する。

各幼稚園が編成した教育課程を実施するために、

- ア) 指導の順序
- イ) 指導内容
- ウ) 指導方法

について具体的にしたもの。

- ②実態の把握について検討する。

実態把握の中心は幼児の実態であり、幼児を取り巻く環境としての幼稚園、地域、家庭（父母の養育についての考え方・傾向）をとらえる。

### (3) 教員の志望者（学生）を対象とした指導能力育成教育システムの構築について

幼稚園・小学校教員から見た道具（ハサミ）の扱い方の指導についてアンケートを実施した

- ①実施期間

平成22年10月1日から25日

- ②対象

東京都内の公立小学校8校の低学年担任教員20名・幼稚園2園の教員10名について調査を実施した。

- ③質問項目

質問1：子どもがハサミやその他の刃物を使っているのを見るとハラハラします。安全面についてどのように指導しますか。

#### <幼稚園の調査結果>

- 1) 幼児の基礎能力としてハサミを使っの作業で安全面についての指導は幼児の個人差が大きいため個別にきめ細かな観察と支援が必要である。
- 2) 年少組ではハサミを握ることができても上に上げて開くことができないので、持ち方と同時に手の動かし方の指導が必要である。
- 3) 生活の中での道具の使い方でカッターもダンボールを切るときに使うカッターは幼児用のものを工夫して使用させる。

#### <小学校の調査結果>

- ・子どもにもハラハラして使わせなかったら、技術の向上は図れない。
- ・ハサミや包丁の購入時に吟味して、先の鋭利な物は選ばない、しかし、包丁など切れ味が悪いほど怪我をするので、切れ味の良いものを使用する。



## 第4章 未来型のこどもの表現力と促進法

- ・安全面では正しい使用の方法を指導する。安全に関する配慮を適時きちんと伝えていくこと。間違った使い方や危険な行為については毅然とした態度で子どもに危ないことを分からせる。
- ・教員の中にはハサミの穴にどの指を入れるかを知らない者もいるので指導者の研修会を実施する必要がある。

### <小学校での具体的な指導>

- ・ハサミは自分の席で必ず座って使用させる。
- ・座って落ち着いて扱うことを徹底する。
- ・ハサミ、包丁などは担任の教員がいるときに使用させる。教員が見ていないときは使用させない。
- ・ハサミや包丁を持ち歩くときは先にサックをはめて持って歩く。
- ・安全な持ち方、振り回さない、振り向かないなど細かな注意をする。

質問2 ハサミなど役に立つ道具が目の前にあるのに、手でちぎってしまう。道具を適切に選ばせて使わせるにはどうしたらよいか。

### <幼稚園の調査結果>

- 1) ハサミは使って楽しいと思うように、いつでも自由に使えるように、まとめて置くよう工夫をしている。使い方に慣れることが大切である。
- 2) 幼児同士で注意し合い、持ち方や紙の切り方まで互いに話し合いながら作業をすることで技能が早く身につく。

### <小学校の調査結果>

- ・授業の際は「今日は生活の勉強なので、これ（ハサミ・包丁）を使って勉強しましょう」と前もって指導する。
- ・学校では日常ハサミを使ったときの良さ、手で切ったり、ちぎったりすることの良さについて指導しておく。具体的な活動を通して作品に取り組みさせ、違いに気づかせていく。気づくことでよさが分かり適切に選ぶことができるようになる。

### <小学校での具体的な指導>

- ・作業ではいくつかのやり方があることを知らせ、その中からどの道具を使えば早く丁寧に作業が出来るか考えさせる。
- ・「まっすぐ切ってみよう」と、ハサミを使わなければならない課題を出して選ばせる。
- ・道具を使ってきれいに処理されたものを見せる。道具をどうやって使ったかを話す。教師がやって見せる。次に使って作業をさせる。

質問3 鉛筆を削るような、道具を使う作業が苦手である。どう指導すればよいか。

### <小学校の調査結果>

- ・ハサミと同様に指導が必要である。家庭での経験が少ないので、学校において意図的に経験させることである。
- ・低学年で鉛筆など削らせる作業はしない、また、させない。
- ・道具を使用させるとき「ゆっくり、丁寧にしよう」「けがはしないから」などと気持ちが安定

## 第4章 未来型のこどもの表現力と促進法

するような言葉かけをする。

### 8. 引用文献

- (1) 牛島義友「社会的な生活能力検査」表6 新・児童心理学講座3「身体と運動機能の発達」 108頁（一部抜粋） 金子書房 1992年
- (2) 谷田貝公昭「箸の持ち方・使い方の実態に関する調査研究」『家庭教育研究所紀要六』32頁 1985年

### 9. 参考文献

- ・岩波講座：「子どもの発達と教育3」（発達と教育の基礎理論）岩波書店 1979年
- ・「事例で学ぶ保育内容」表現 無藤 隆・浜口順子共著 萌文書林 2008年